

日本油機
相模原市中央区

目先にとらわれるな。未来を視よう。

日本油機は①プラスチック成形機のスクリュ・シリンダーの設計・製作②プラスチック・リサイクル装置の設計・販売を行っている会社である。スクリュとは、螺旋螺子の形状をした一本の金属の棒のようなもの、そしてシリンダーとは肉厚の鉄パイプ形状をしたもので、プラスチックの製品をつくる機械の重要部品であり、プラスチックの粒状の原料「ペレット」をプラスチック製品の型に送り込む役割を果たしている。このスクリュ・シリンダーは取り扱うペレットの材質や特性に合わせて、太さやねじりの間隔などが異なる。プラスチック・リサイクル装置は、プラスチック製品の加工で出た破材などを１００％再利用し、プラスチックの元になるペレットを製造するという優れた装置である。装置には「SR ルーダー・バンビ」という名前が付いている。

温かいあいさつ
～コミュニケーションはあいさつから～

「こんにちは～」とにこやかな笑顔で迎えてくれた日本油機の方々。

取材ツアーの一番始めということでとても緊張していた私たちの体は、温かいあいさつのおかげで少しほぐれた。とうとう始まった取材。見学が進むに連れて、社内の印象はさらに良くなった。このような場面があった。私たちに見せようと市川博章社長がスクリューを手にしようとしたら、すぐにそばにいた従業員の方が「それ熱い、熱いよ！」と教えてくれたのである。そう、なんといっても社長と従業員の距離がとても近いのだ。社長にこんな風に言える関係が素晴らしいと思う。大企業だとなかなか現場の声を社長は聞こうとしないし、従業員も話しかけることができないイメージがある。しかし、この会社は従業員数１５名という中小企業だからだろうか、社長と従業員が仲良さそうに会話をしている。だからといってメリハリがないわけではない。それがわかりやすく表れていた光景だった。

「知恵を出し打たれる前に響くようになれ」という言葉が工場の壁に掲げられていた。意味を市川社長に尋ねてみたところ、「誰かに何かを言われて動くより先に、自らが気づき動くようになりなさい、ということを表している」という返答だった。なるほど、と思った。これはどんな仕事にも言えることだ。

こだわりの力～今を生き抜く～

「リーマンショック後は大変だった」。この取材ツアーで多くの社長が口にしていた言葉である。世界に広がった不況の波。日本の中小企業に打撃を与えないわけがない。もちろん日本油機もリーマンショックの影響を受けて、苦労した。

しかし、市川社長は「あきらめない精神が大切だった」と語った。「あきらめない精神」。それは口で言うほど簡単なものではないと思う。その時の様子を尋ねてみると、やはりいろいろ工夫をされたようだ。まず、暇をつくらなかった。待っているだけでは仕事の依頼は来ない。自ら動くべきなのである。そこで、仕事の依頼を探すべく、営業担当者だけでなく全従業員で仕事を探し、とってきた。

依頼通りの仕事だけでは、お客さまは離れてしまうかもしれない。そこで、“こだわり力”である。例えば、“SR ルーダー・バンビ”の製造には、約４０社の企業と長期にわたる協力関係を構築している。そこには、多くの企業が持ち寄るさまざまな技術を取り入れることで、より良い製品をつくろうという日本油機のこだわりが表れている。

市川社長は、「１００％の良品を販売したい。一人ひとりのお客さまにあった製品を作りたい。きちんとしたアフターケアが重要だ」と強調した。これらのこだわりによって、口コミで仕事もくるようになった。

一石三鳥
～経費削減・破材の有効活用・環境破壊の防止～

先ほど説明した“SR ルーダー・バンビ”。これは今の時代の流行であるエコを行っている。ゴミとなってしまうものを再利用できるようにするからだ。この会社が目をつけたのは２０年も前からである。深刻化する環境問題。このことに早くから気づき、実行してきた。ただ実行してきたわけではない。再利用というと、元の質よりも下がるイメージがあるが、この装置はそのイメージを払拭する。この装置で再生するペレットは、普通につくられたペレットと同じぐらい良いものを製造できる。ペレットにも質があり、良いペレットは形が均一で、異物などを混合しない。プラスチックの破材を再利用することは難しいのだが、この会社はそれをやったのだ。これは地球への配慮によるものである。

地球への配慮も忘れずに、さらに経費削減にもつながるというなんとも人間と自然に優しい装置なのだろうか。

先ほどから何度も登場している“SR ルーダー・バンビ”。そろそろ名前も覚えたでしょう。この装置で日本油機は海外進出もしている。取引先は主にアジア圏である。アジア圏ではライバルである中国製の装置もあるのだが、同社の機械は中国製に負けない。価格では中国製２００万円、日本油機製６００万円と高いが、製品の質では負けるわけがない。性能へのこだわり、アフターケアなどの徹底、また、製品の寿命の長さで勝っている。なんと２０年は持つというから驚きである。商売として成り立たないのではと、心配になってしまう。

次世代へ～学生よ、覚醒せよ～

学生たちには、大手企業に目を向けることも良いと思うが、大手企業を支えている中小企業にも目を向けて欲しい。中小企業には大手に負けない技術がある。

そしてもうひとつ。今の世の中、グローバル化が騒がれている。このような現状で市川社長に「学生時代に何をしておけば良かったと思いますか？」と無茶な質問を投げかけたところ、「英語の勉強」という返答がきた。グローバル化が進んでいるということは世界共通語である「英語力」がなくてはならないものになる。日本の学生の弱点になりかねないのでしっかり勉強しておいた方がいい。ちなみに市川社長が欲しい人材は「好奇心が強くて、英語が話せる人」らしい。当てはまる方は日本油機という素晴らしい会社を受けてみてはいかが。

株式会社日本油機

所在地	相模原市中央区東淵野辺４－２－２
代表者	代表取締役社長　市川 博章
資本金	２，５００万円　　創業　昭和５７年
従業員数	１５名
事業内容	プラスチック成形機（射出・押出・中空）のスクリュ・シリンダ 設計製作 プラスチックリサイクル装置の設計・販売 成形のコンサルタント
電話（代表）	０４２－７５７－６６８１
ホームページ	http://nihon-yuki.co.jp/

担当　三上 亜利香